

Title	土方巽アーカイヴ：22年の歩み及び今後の展開
Sub Title	Hijikata Tatsumi archive : 22 years of history and development
Author	石本, 華江(Ishimoto, Kae)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学アートセンター年報/研究紀要 (Annual report/Bulletin : Keio University Art Center). Vol.27(2019/20), ,p.172- 182
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究紀要
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11236660-00000027-0172

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

土方巽アーカイヴ —— 22年の歩み及び今後の展開

石本 華江
所員、講師（非常勤）

はじめに

慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴ（以下、土方アーカイヴ）は2020年で22年を迎える。「アスベスト館から寄託された資料に、アート・センターで作成された研究資料、国内外の舞踏研究の論文などが加わった、世界有数のダンス資料のコレクション」*1と森下隆が記述しているように、現在土方アーカイヴに保存・管理している資料は、下記の通り大規模なものである。写真11,052、動画211、音声資料364、エフェメラ329、舞踏譜スクラップブック16、バインダーおよびスクリプト・シート255（1,300枚）、原稿15バインダー、書簡2,050、エフェメラ329、衣裳4、舞台美術20、書籍1119、雑誌836、新聞（記事のみ登録）296、合計16,326件である（未整理資料含まず）。単位が系列ごとに異なるが全てを1件として数えた。また高井富子資料：63件、池宮信夫資料：1,208件、石井満隆資料：1,470件、副島輝人資料：6,203件、辻村和子資料：232件を所管*2。中核となる土方アーカイヴ資料に加えて、これら資料群の整理また今後の管理方針を決定することが必要に迫られている。

本論考では土方アーカイヴの軌跡とこれからの課題をまとめておきたい。

土方アーカイヴの変遷及び資料保存活動

1993年慶應義塾大学アート・センター（以下、アート・センター）は設立された*3。そして1998年にアート・センターに開設された土方アーカイヴは現代芸術に関する「研究アーカイヴ」として具体的な試みであった*4。土方巽記念資料館（アスベスト館）から一次資料を数多く寄託され、資料の収集・保存・管理を行うアーカイヴとしての活動が開始した*5。

中でも湘南藤沢キャンパスを中心に進められてきた文部省科学研究費補助金（COE形成基礎研究費）による企画『創造的デジタルメディアの基礎と応用に関する研究』の3年目に「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」研究プロジェクトにて土方アーカイヴがパイロットモデルとして取り上げられたことは大きな意味を持つ。「アーカイヴとは特定の主題に関してドキュメント（一次資料）を収集・整理・保存・管理する機関を意味するが、本プロジェクトにおけるアーカイヴは、特に研究上の関心を活動の中核におく『研究アーカイヴ』に該当する。研究アーカイヴとは、上記の活動に加えて、さらに、特定主題に関する研究文献（二次資料）の収集や研究情報探索の具体化を図る活動である。」と鷲見洋一が述べているが*6、「ジェネティック」をキーワードとして研

究活動がスタートしたのである。

また2001年から5年間はオープン・リサーチ・センター整備事業（ORC）として研究助成を受け、デジタルアーカイヴ・リサーチセンター（DARC）として組織を編成、土方アーカイヴも研究プロジェクトの一つとして活動を行なった^{*7}。そこでは後述する「動きのアーカイヴ」を構築し、「舞踏譜の舞踏^{*8}」に関して一定の研究成果を残せたことを特記しておく。2005年からは文部科学省の「戦略的研究拠点育成プログラム」で採択されたデジタルメディア・コンテンツ統合研究機構（DMC）にアート・センターとして提案した基幹プランである「ポートフォリオ舞踏^{*9}」のプログラムを提案し、山本萌「正面の衣裳」に関する「動きのアーカイヴ」を始めとして現在に至るまで多様な活動を行ってきた。

二次資料の収集・蓄積と研究情報検索の具体化を図ると共に、展示やイベントなどの機会を利用して自らが研究資料の創造を行う「研究アーカイヴ」であること、加えてデジタルメディアやシステムを利用して保存及び情報検索など公開の方法を探る「デジタルアーカイヴ」を目指していることも土方アーカイヴの特徴である。一次資料の整備を基本としつつ、さらに資料のデジタル化を積極的に行っている。これらの作業を経て、資料の展覧会仕様を図るとともに、資料のデジタル保存および「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」と名づけられた独自のアーカイヴ・システムによる芸術情報に適したデータベースの開発を進めてきた。芸術作品の創造過程が解明されうるような生成過程についても重点を置いた、アーカイヴ・システムの設計を重視してきたことも特筆すべきだ^{*10}。

アーカイヴの具体的な活動は、1972年の公演《四季のための二十七晩》に関する資料整理から始まった。網羅的な収集と整理を行い、土方巽記念資料館（アスベスト館）に所蔵される文献資料について資料ドキュメンテーション、データ入力、情報検索のためのキーワード抽出というアーカイヴ・ワークを行なった。また小野塚誠、中谷忠雄の写真資料を中心に、網羅的な整理と一部デジタル化を開始する^{*11}。

2001年には写真家中谷忠雄より約4000点の写真資料の寄託を受け、「中谷忠雄コレクション」として同年中に約5000点をCD-ROM47枚に収録する。中谷コレクションは主に1960年代の資料が多く、土方が舞踏を作り出した過程や当時のアスベスト館の様子を知ることができる大変貴重な資料である。他にも2003年小野塚誠により寄託された写真資料約4800点も同年にデジタル化を行う。中谷コレクションの少し後、1970年代以降の活動を網羅しており、アスベスト

館連続シリーズとも呼ばれる白桃房の公演や当時の弟子たちの生活を知ることができ、アーカイヴの中核となる資料群である。

2002年にも映像（8ミリ、16ミリ・フィルム）のデジタル化（DVD）、2003年＜肉体の叛乱＞映像（中村宏撮影）のデジタル化を行い、公開を行う。加えて土方全集テキストのデジタル化を開始（2002年）、その後続々とデジタル化を行い2010年頃には一部を除く大部分のデジタル化を完了させた。また初期より継続して行ってきた雑誌・書籍・新聞記事の書誌情報及び記事の閲覧・検索の整備は2004年頃には概ね終了し、web上でも公開をしている^{*12}。さらに2003年には小林嵯峨の「舞踏ノート」のデジタル化を実施したのをきっかけに、山本萌「舞踏ノート」寄託や和栗由紀夫「私家版 舞踏譜」の寄贈があった。

2006年からは第二期のDARC活動として諸資料の分類方針を新たに策定し、アーカイヴ論に基づいた実践活動を展開する。資料の多様性を表現するために分類群の数を制御し下部に系列を設けること。特に「エフェメラ＝一過性のもの」と一律に分類されてきた印刷資料に「印刷物 printed matter」という分類を設け、より詳細な調査を行えることとした^{*13}。また資料保管庫の環境整備のため、中性紙による保護を始めとする空調・照明・サーバー室等の整備を2006年より2008年まで続け資料保存器材の充実を図った。さらに2006年ファイルメーカーを用いたデータ入力・整理を開始、エフェメラ画像のデータコレクション「ポルタス・ラビリントス」^{*14}を作成した（2007年）。2008年には「RCAAA web project Release Candidate」を公開する^{*15}。2013-15年には書簡類の整理を完了、舞踏譜のスクラップシートの整理を開始している^{*16}。2017年から石井コレクションのデータ整理を開始、池宮、元藤燐子資料と、順次基礎情報をまとめ、作業を継続している。2019年にはアート・アーカイヴ20周年を記念し、研究フォーラムやシンポジウムなどのイベントが開催され^{*17}、改めて20年の取り組みを自己評価する機会を設けた。

土方アーカイヴの実施してきた展示や催事

土方巽アーカイヴ開設記念として行った「《四季のための二十七晩》をめぐる」（1998年）の展示や公演、シンポジウム、ワークショップを開催したことを筆頭に^{*18}、「＜バラ色ダンス＞のイコノロジー——土方巽を再構築する」（2000年）、「アート・アーカイヴ資料展Ⅲ 1968 ——肉体の叛乱とその時代」（2008年）、「アート・アーカイヴ資料展Ⅱ 1978」展（2008年）、「アート・アーカイヴ資料展Ⅷ 土方巽＋中西

夏之 背面」展(2012年)等の資料展、「土方巽 舞踏大解剖」として6回にわたる上映会を開催するなど研究活動の一環として展示やイベント、小冊子の発行などを行ってきた。

加えて2003年から2004年にかけて行われ18,000人の入場者を数えた、川崎市岡本太郎美術館での「肉体のシュルレアリスム——土方巽抄」展に協力したことを特記しておく。展覧会図録『土方巽の舞踏：肉体のシュルレアリスム 身体のアートロジー』も土方アーカイヴが主に構成を担当し、岡本太郎美術館との共同編集、慶應義塾大学出版会の制作協力を得て刊行した^{*19}。美術館で会期中に完売しただけでなく、一般書店でも現在に至るまで販売が行われている。土方の活動を紹介する上で一つのバイブルとなっており、和書にも関わらず買い求める外国人も多い。

さらに2013年「フランシス・ベーコン展」にて舞踏譜(スクラップブック「なだれ飴」、21枚のシート「ベーコン初稿」)及び公演記録映像〈疱瘡譚〉(一部)が展示会場にて大きく展示され反響を呼んだ。他にも青森にて2008年、2015年に青森県立美術館での展示、また秋田にて2014年秋田市文化会館、2016年秋田市赤れんが郷土館と大規模な展示を行い、鎌鼬美術館の開館協力へと繋がってゆく活動となった。

また2005年、韓国ソウルで開催された舞踏フェスティバ

ルにおける「土方巽展」(会場・国際交流基金ソウル日本文化センター)への作品出品やレクチャーを行ったのを始めとして、2009年ブラジル、2011年フランス、マレーシアでの展示監修や講演など現在に至るまで海外での展示協力を行なっている。

2011年より土方の命日に行われる「土方巽を語ること」^{*20}、さらに1994年より連続して開催され^{*21}2019年には22回を迎えた新入生歓迎行事への協力は毎年恒例の企画として多くの来場者に親しまれてきている。特に新入生歓迎行事は既存の舞踏ファンだけでなく、舞踏には親しみのなかった大学生及び日吉の慶應義塾高等学校から高校生も訪れる。大野一雄、慶人の出演により〈御殿、空を飛ぶ〉から始まった本企画は、恐怖や好奇心、驚きを持って大きなインパクトを与えつつ受け入れられ大変好評である。学生たちに世界第一線の舞踏家による公演を生で観る機会を与えており、非常に有意義な催事であると考えている。個人的なことではあるが、私自身も慶應大学へ入学した2000年に7年続いた大野一雄による最後の新入生歓迎行事舞踏公演〈宇宙の花〉に触れ、舞踏を観る初めての経験となったことを書き添えておく。大袈裟な言い方ではあるが、慶應義塾大学に入学しなければ舞踏を体験しないまま現在に至っていたのかもしれない。

展示リスト

展覧会名	開催年	場所
土方巽アーカイヴ開設記念《四季のための二十七晩》をめぐって 資料《四季のための二十七晩》	1998	慶應義塾大学
〈バラ色ダンス〉のイコノロジー——土方巽を再構築する	2000	慶應義塾大学
アート・アーカイヴ資料展Ⅰ ノートする4人——土方、瀧口、ノグチ、油井	2006	慶應義塾大学
肉体のシュルレアリスム——土方巽抄	2003	川崎市岡本太郎美術館
アート・アーカイヴ資料展Ⅱ 1978	2008	慶應義塾大学
アート・アーカイヴ資料展Ⅲ 1968——肉体の叛乱とその時代	2008	慶應義塾大学
インスタレーション 命の実感プログラム「土の土方像と水滴の時間」	2008	慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス
土方巽と日本のアヴァンギャルド	2008	青森県立美術館
アート・アーカイヴ資料展Ⅴ アーカイヴの現場	2010	慶應義塾大学
アート・アーカイヴ資料展Ⅷ 土方巽+中西夏之 背面	2012	慶應義塾大学
フランシス・ベーコン展	2013	東京国立近代美術館、豊田市美術館を巡回
第29回国民文化祭「舞踏・舞踊フェスティバル in Akita」企画展示「土方巽・舞踏の世界」展	2014	秋田市文化会館
「土方巽・舞踏の世界」土方巽の芸術——DANCE EXPERIENCE から DANCE METHOD へ	2015	青森県立美術館
アート・アーカイヴ資料展Ⅹ 鎌鼬美術館設立記念 KAMAITACHI と TASHIRO	2016	慶應義塾大学
土方巽の秋田、秋田の土方巽	2016	秋田市赤れんが郷土館
鎌鼬美術館開館	2016	鎌鼬美術館
前衛舞踏家土方巽の世界	2017	福井パレオ若狭
アート・アーカイヴ資料展ⅩⅧ 土方巽、トリックスター／肉体の叛乱 1968-2018	2018	慶應義塾大学
鎌鼬の里芸術祭 2017-2019	2017-2019	鎌鼬美術館

出版物リスト

	編著者名	書名・特集名	発行	
定期刊行物				
慶應義塾大学アート・センター ブックレット	慶應義塾大学アート・センター編	ジェネティック・アーカイヴ・エンジン デジタルの森で踊る土方巽 (慶應義塾大学アート・センター ブックレット 6)	2000	
	慶應義塾大学アート・センター編	芸術のロケーション (慶應義塾大学アート・センター ブックレット 12)	2004	
	慶應義塾大学アート・センター編	mandala musica (慶應義塾大学アート・センター ブックレット 26)	2018	
慶應義塾大学アート・センター ARTLET	慶應義塾大学アート・センター編	ARTLET10	1998	
	慶應義塾大学アート・センター編	ARTLET11	1999	
	慶應義塾大学アート・センター編	ARTLET12	1999	
	慶應義塾大学アート・センター編	ノーテーション (ARTLET15)	2001	
	慶應義塾大学アート・センター編	ファッション (ARTLET17)	2002	
	慶應義塾大学アート・センター編	Art Documentation and Registration (ARTLET20)	2003	
	慶應義塾大学アート・センター編	CADとデザイン (ARTLET22)	2004	
	慶應義塾大学アート・センター編	映画における真実 (リアル) (ARTLET25)	2006	
	慶應義塾大学アート・センター編	Note ノートする (ARTLET26)	2006	
	慶應義塾大学アート・センター編	東北と芸術 (ARTLET 36)	2011	
	慶應義塾大学アート・センター編	アート・センター 20年の歩み (ARTLET40 別冊)	2013	
	慶應義塾大学アート・センター編	アート・センター開設20年——芸術の未来に向けて (ARTLET40)	2013	
	慶應義塾大学アート・センター編	舞踏、その世界 (ARTLET42)	2014	
	慶應義塾大学アート・センター編	アートと地域連携 (ARTLET47)	2017	
	慶應義塾大学アート・センター編	Butohの現在Ⅱ 土方巽への問い (ARTLET50)	2018	
慶應義塾大学アート・センター編	KUAC アーカイヴコレクション (ARTLET51)	2019		
慶應義塾大学アート・センター 年報/研究紀要			1998- 2019	
単行書	土方巽アーカイヴ編	土方巽 [舞踏] 資料集第1歩	2000	
	鷺見洋一、前田富士男、森下隆、柳井康弘 企画・編集	くバラ色ダンス」のイコノロジー 土方巽を再構築する	2000	
	前田富士男、渡部葉子、森下隆、本間友 企画・編集	肉体の叛乱——舞踏 1968/ 存在のセミオロジー	2009	
	森下隆	土方巽 舞踏譜の舞踏——記号の創造、方法の発見	2010	
	Takashi Morishita	Hijikata Tatsumi's Notational Butoh: an Innovative Method for Butoh Creation (英訳・増補版)	2015	
	森下隆編	舞踏に関する国際的な共同研究拠点の形成 2009 [報告書]	2010	
	渡部葉子、本間友編	平成 21 年度 文部科学省 人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業 芸術創造資源のための対話型アーカイヴ構築推進プログラム キックオフ・シンポジウム 対話型アーカイヴの可能性 [報告書]	2010	
	慶應義塾大学アート・センター編	アート・アーカイヴ——多面体：その現状と未来 記録集	アート・ドキュメンテーション学会、慶應義塾大学アート・センター	
	森下隆、本間友編	Project Rebirth 幻の万博映画「誕生」——アストロラマで踊る土方巽へ	2011-12	
	慶應義塾大学アート・センター編	アート・アーカイヴ・マネジメント WG	2015	
	橋本まゆ、森山緑編	KUAC ART ARCHIVE 20周年ジェネティックエンジン報告書	2019	
	松下鈞、柳井康弘、山本浩幾編	文部科学省「オープン・リサーチ・センター整備事業 (平成 13 年度～平成 17 年度)」研究報告書 パフォーミング・アーツ・アーカイブの現在	慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター	
		進化するアーカイヴ 慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター報告書 (2001-2006)	慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター	
		デジタルアーカイヴ——その継承と展開 慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター報告書 (2006-2009)	慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター	
	アート・アーカイヴ資料展カタログ	慶應義塾大学アート・センター編	アート・アーカイヴ資料展Ⅰ ノートする4人——土方、瀧口、ノグチ、油井	2006
		慶應義塾大学アート・センター編	アート・アーカイヴ資料展Ⅱ 1978	2008
		慶應義塾大学アート・センター編	アート・アーカイヴ資料展Ⅲ 1968 ——肉体の叛乱とその時代	2008
		慶應義塾大学アート・センター編	アート・アーカイヴ資料展Ⅴ アーカイヴの現場	2010
		森下隆、本間友編	アート・アーカイヴ資料展Ⅷ 土方巽+中西夏之 背面	2012
	慶應義塾大学アート・センター編	アート・アーカイヴ資料展ⅩV 鎌田美術館設立記念 KAMAITACHIとTASHIRO	2016	
森下隆編	アート・アーカイヴ資料展ⅩⅧ 土方巽、トリックスター/肉体の叛乱 1968-2018	2018		
その他のアート・アーカイヴに関する 展覧会カタログ	慶應義塾大学アート・センター、土方巽記念資料館編	四季のための二十七晩	1998	
	川崎市岡本太郎美術館、慶應義塾大学アート・センター	土方巽の舞踏 肉体のシュルレアリスム 身体のアントロロジー	慶應義塾大学出版会	
その他発行の逐次刊行物・報告書など	慶應義塾大学アート・センター (土方巽アーカイヴ) 編	国際舞踏カンファレンスIBC2009 [報告書]	国際舞踏連絡協議会 LIB	
	大林のり子、小菅準人、大谷理奈、本間友、森山緑	Psi 2015 TOHOKU [国際パフォーミング・スタディーズ学会 2015 東北大会] けがれを超えて：パフォーミングと東北 (身体・霊性・巡礼)	慶應義塾大学アート・センター	
	小菅準人、森下隆、本間友、亀村佳宏	日本演劇学会紀要 50『演劇論集』「演劇研究の新たな可能性『命の実感プログラム——土の土方と水滴の時間』の実践について」	日本演劇学会	
	山本萌	COSTUME EN FACE : A PRIMER OF DARKNESS FOR YOUNG BOYS AND GIRLS	Ugly Duckling Presse	
	森下隆	写真集土方巽——肉体の舞踏誌	勉誠出版	
			2014	

海外展示リスト

展覧会名	開催年	国名	開催場所	開催報告
土方巽展	2005	韓国	国際交流基金ソウル日本文化センター	
A REVOLTA DA CARNE: DIALOGOS BRAZIL — JAPAO	2009	ブラジル	サンパウロ SESC Consolacao	http://blog.art-c.keio.ac.jp/report/2009/08/tatsumi-hijikata-sao-paulo/
Le Printemps de Septembre- a Toulouse, D' UN AUTRE MONDE フェスティバル Tatsumi Hijikata 展	2011	フランス	トゥールーズ Musee les Jacobins、ディジョン現代美術センターへ巡回	
NYOBA KAN / MALAYSIA BUTOH FEST 2011	2011	マレーシア	クアラルンプール Annex Gallery	
《肉體的叛亂》土方巽文件回顧展	2013	台湾	台北 交番劇場	http://blog.art-c.keio.ac.jp/report/2013/11/butoh-in-taiwan/
Richard Hawkins : Hijikata Twist	2014	イギリス	テート・リバプール	
国際舞踏コンフェレンス & パフォーマンス “Butoh Season”	2014	マレーシア	クアラルンプール Tunku Abdul Rahman University College	http://blog.art-c.keio.ac.jp/report/2014/06/20-report-butoh-season/
“Rebellion of the Body” to “Story of Smallpox”	2016	メキシコ	メキシコシティ、チョボ大学	
Our Masters Hijikata Tastumi <방안 / glossolalia >	2016	韓国	広州 Asia Cultural Center	
PROVOKE: Protest and Performance	2016	オーストリア、スイス、フランス、アメリカ	ウィーン アルベルティーナ美術館、ヴァンタートゥール Fotomuseum Winterthur、パリ Le Bal、シカゴ The Art Institute of Chicago へ巡回	
Choy Ka Fai, The Wind that cuts the the body	2017	シンガポール	NTU Centre for Contemporary Art Singapore	
JAPANORAMA : NEW VERSION ON ART SINCE 1970	2017	フランス	メス、ボンピドー・センター・メッス	

ない。

過去に行ったプロジェクトとして「動きのアーカイヴ」プロジェクト、さらに「Project Rebirth 幻の万博映画『誕生』——アストロラマで踊る土方巽へ」（2011年）プロジェクトを取り上げたい。

「動きのアーカイヴ」は土方の弟子である小林嵯峨、和栗由紀夫と山本萌の協力により、土方の創り出した記譜法である「舞踏譜」の解明に向けて、舞踏家による実演を記録してゆくプロジェクトである。デジタルアーカイヴ・リサーチセンター（DARC）の活動の一環として和栗由紀夫の実演と土方巽振付、山本萌主演〈正面の衣裳〉（1976年）の山本による実演を映像に残している^{*22}。2003年に小林嵯峨、和栗由紀夫の撮影から開始し、同年に山本萌による「舞踏ノート」の寄託、和栗由紀夫「私家版 舞踏譜」寄贈を受ける^{*23}。さらに和栗由紀夫により2005年にも19回（19日間）約180項目にわたる撮影を行い、和栗に残された主要な舞踏譜を網羅している。同年には「動きのアーカイヴ」データベースの

テスト版として、デジタル版資料集「Data Map for Corpus of Documents」としてファイルメーカーを元にデータを整備した^{*24}。他にも「タイムライン・メソッド」の試作、また2007年まで5回の撮影を行い山本萌が当時の公演ノートに基づいて再現した実演映像を収録した。山本の映像を素材として舞踏譜の森羅万象をデジタル空間で表現する「スフィア・コネクション——アメンバー状球体空間における〈動き〉の森羅万象 the whole creation」の開発^{*25}など実験的な試みがあった。

一旦の成果として2007年にDVD「土方巽の舞踏譜の舞踏 Hijikata Tatsumi Notational Butoh」（日・英語版）を製作^{*26}。現在もアーカイヴ来訪者に配布を続けている。また森下隆によって2010年に『土方巽 舞踏譜の舞踏——記号の創造、方法の発見』、2014年にはその英語訳本 *HIJIKATA TATSUMI'S NOTATIONAL BUTOH — AN INNOVATIONAL METHOD FOR BUTOH CREATION*^{*27} を発行。また同年に山本萌の舞踏ノート「正面の衣裳」の英語翻訳 *COSTUME*

EN FACE : A PRIMER OF DARKNESS FOR YOUNG BOYS AND GIRLS^{*28} が出版されたことも特記しておく。2011 年には立教大学現代心理学部（佐藤一彦研究室）の協力を得て、和栗の 3D 撮影など新たな撮影技法と映像表現を試みた。2017 年和栗由紀夫の急逝は舞踏研究においても大きな損失であるが、土方アーカイヴに本人による実演映像と舞踏譜が残されていることは今後の研究においてせめてもの救いである。

1970 年大阪万国博覧会の展示パビリオン「みどり館」では、アストロラマと名付けられた全天全周映画として〈誕生〉が上映された。黛敏郎の監修のもと、学習研究社が制作、脚本を谷川俊太郎、音楽を黛敏郎がそれぞれ担当し土方が出演した映像作品は万博終了後上映の機会もなく幻の映画となっていた。演出を担当された学研映画の秋山智弘より寄贈されていた北海道ロケの写真や 35 ミリの〈誕生〉ラッシュ・フィルム調査及びデジタル化（2010 年）を皮切りに、日本万国博覧会記念機構での資料調査、みどり館の運営主体であったみどり会での調査を実施する。さらに五藤光学研究所でのインタビュー、2011 年には貴重な資料の提供を受けて調査を進めた^{*29}。これらの資料はみどり会より預託を受け現在も土方アーカイヴにて保管されているが、2020 年には高島屋史料館 TOKYO の企画展「大阪万博カレイドスコープーアストロラマを覗くー」に資料が出展された（1 月～4 月、東京都）。アーカイヴで行った研究活動により、こうした展示協力を通して展開の場が与えられたことは喜ばしい。また続けて、大阪大学総合学術博物館（6 月～8 月、大阪府）にも出品されることが決まっており、連続して展示の機会を得られていることもここで報告したい。

土方アーカイヴへの来訪

1998 年に開設後、1999 年に暫定的に一般利用の受付を開始した土方アーカイヴであるが、2001 年には 124 名の来訪者を迎えることから始まり^{*30}2004 年には 226 名と約 2 倍になる^{*31}。週 3 日から始まった閲覧サービス^{*32}は現在週 5 日へと拡大、順次来訪者数は急増している。アーカイヴの枠を越えて、舞踏情報センターとしての機能も果たしていることも特筆すべきであろう。舞踏や土方を学術的に研究する場であるだけでなく、世界各地から舞踏を学びに来たアーティストや研究者が土方について、また広く舞踏について学び、情報を得る場を提供している。なお土方アーカイヴでの昨年度の来訪者は約 180 名のうち外国人は約 120 名、70%であった。彼らは主に研究者というよりも、舞踏ファンであり、海外か

ら舞踏のワークショップを受けるため、また舞踏の生まれた日本について学びにくる。語弊はあるが「舞踏聖地巡礼」とも「舞踏インバウンド」とも呼べるような、ニューツーリズムの一種と言えるこの現象は、むしろ海外からの参加者のいない舞踏ワークショップは東京ではほぼ皆無である状況を考えたと現在の舞踏を取り巻く環境において無視はできない。無論、海外で行われるワークショップでは言わずもがなである。実際私の主催した研究会 POHRC (Perspectives On Hijikata Research Collective)^{*33}においても、7 年間における参加者 153 名において外国人は 89 名と 58 パーセントが外国人であった。

初学者である彼らは土方アーカイヴにて初めて土方の映像や写真、文献に触れ、自身の創作活動のインスピレーションを得る。また日本語を読み話さない外国人にとってはアクセスし難い日本での舞踏ワークショップや公演の情報を提供したり、また舞踏家へのインタビューや撮影のセッティングをしたり、といったサポートも行なっている。「舞踏の聖地」である日本では、日本人誰もが舞踏について知っているであろうと期待して来日する彼らは日本での舞踏の認知度の低さに失望するのはよく言われる話だ。その中で、もはや会うことすら叶わない土方の資料に直に触れ、学ぶことができる土方アーカイヴの果たす役割は大きい。資料保存の観点で考えると矛盾を抱えているのだが、オブジェクトベースドラーニングの観点においてアーカイヴだからこそその経験を提供していると言えると同時に、アーカイヴが資料センターならびに情報センターの役割も備えていることの意義は特に外国人舞踏愛好家の口コミにより来訪者が後を絶たないことから伺える。

日本での舞踏の状況と比較しても、海外での圧倒的なフェスティバル数やアーティスト招聘数、予算規模ならびに日本人舞踏家の海外流出なども考えると、日本での舞踏の状況と比べアーカイヴ来訪者に占める外国人の割合が高いのも納得である。加えて舞踏に関する興味の高さに応じるように、海外から美術館での展示や雑誌、TV 番組、映像作品等の取材などで問い合わせは後を絶たない。論考の執筆等で図版を探したり、パフォーマンスアートや戦後芸術の研究、また振付法に関しての資料を求めたり、といった問い合わせも数多く、アーカイヴでの日常業務はほぼ全てその対応に追われている状況だ。

その他カンファレンス、公演企画、研究活動

前述したような海外にて広まった舞踏の現状を討議するた

め、国際舞踏カンファレンス「Butoh Abroad Today : Its Extension and Succession」(2009年)としてフランス、スウェーデン、イタリアから3名の舞踏家や研究者をゲストスピーカーとして招き、他にも7名の舞踏家と研究者を国内外より招聘し海外での舞踏の状況や受容について第一線の声を紹介することができた^{*34}。また舞踏家との関係を密接にしているのが、公演の企画制作だ。2004年 BankART 1929 Yokohama での「アスベスト館ウィーク 舞踏の火、舞踏の華」(主催：土方巽記念アスベスト館、構成・森下隆)を始めとして、「海外女流ダンサー・ウィーク東京」(2013年)^{*35}「舞踏交流・海外ダンサーシリーズ vol. 2 世界から BUTOH がやってくる！」(2016年)^{*36}「土方巽、トリックスター／肉体の叛乱 1968-2018」(2018年)^{*37}など舞踏公演のプロデュースを行うことで、外国人舞踏家を日本に紹介する場を積極的に設けてきた。また前述した2005年韓国での舞踏フェスティバルにおいてレクチャーを行ったのを始めとして、2006年ロシア、2007年ニューヨークと現在に至るまで毎年のように公演企画・講演など海外舞踏フェスティバルへの協力を行なっている^{*38}。

加えて青森県立美術館と P*S*i 2015 FLUID STATES 東北大会「けがれを超えて：パフォーマンスと東北(身体・霊性・巡礼)」(2015年)を開催^{*39}。Performance Studies international (国際パフォーマンス・スタディーズ学会)において、舞踏の文脈を超えた研究活動も行なっている。また土方巽の舞踏の源を探る古川近辺の研究を行った、港区とアート・センターによる共催事業「アート・マネジメント講座 2009-2010」の一環としてのワークショップも行われた^{*40}。2011年には「ウィリアム・フォーサイス×土方巽 身体のイラストレーション」においてダンスの記譜法に関する研究会を行う^{*41}。これらの研究活動により、舞踏研究が従来持っていた方法とは違う視点・観点で舞踏及び舞踏譜、また芸術家だけでない人間としての土方を捉える貴重な機会となったと考える。

加えて「『病める舞姫』を秋田弁で朗読する」企画を2010年より開催し^{*42}、2014年と継続して地域交流の場を設けたり^{*43}、命の実感プログラム「土の土方像と水滴の時間」(2008年)としてインスタレーションを制作したり^{*44}といった多様な企画も行っており、舞踏から広く展開した活動もここで明記しておく。2018年には Keio University FutureLearn のオンライン・コース「Exploring Japanese Avant-garde Art Through Butoh Dance」に全面的に協力^{*45}。本コースは2018年9月より開講、2019年6月までの間に78カ国1300名を超える受講者を得て3回の更新後、継続して提供されるコー

スとなった。外国人の初学者にとって、英語で学べる貴重な機会を与えており大変に好評を得ている。

土方アーカイヴの課題、また今後の展開

2006年の報告書には、以下のような指摘が既にされている。「問題点もその克服も、デジタル化された資料をいかに運用するか、ひいてはデジタル技術をいかに駆使するかにあるわけではあるが、現状には不十分な点が少なくない」^{*46}。この点に関しては2020年の現在も、同じ課題を抱えている。デジタル技術は日々変わり続ける。この変化にいかに対応してゆくか、当時最先端であった技術も現在では運用することさえ難しく、せっかく整えたデータベースも現在では参照することさえできない。

2002年度には理工学部遠山研究室、2003年には株式会社 BEAT との共同システム開発と公開を行った。堀内カラーと東京大学が協同開発した iPallexTM のカスタマイズを依頼した付箋システムなどの試みもあった^{*47}。デジタル化した画像に「電子付箋」をつけ必要な情報を書き込むようなイメージで、個々の貼付資料、銘記を記録する方法が試行されている。また前述のファイルメーカーによるデータベースやスフィア・コネクション、また2014年には舞踏譜「なだれ館」の iPad を活用して参照するプログラムなども作成された^{*48}。

インターフェイスデザインや検索の項目の取り方一つとっても、システムの利用者(つまり管理者及び研究者などのユーザー)によるニーズをいかに取り込んでゆくのか、またアクセシビリティをどう改良させてゆくのか、十分な検討が必要だ。そして一般化させることによるセキュリティの問題や、著作権の問題なども大きく関わってくる。現状土方アーカイヴではファイルメーカーでデータを管理しているが、システムアップデートを行うだけでもデータ消失のリスクに晒されるのも事実だ。またバックアップ、そのものの問題もある。災害時に備えたデータの一括管理や遠隔地でのデータ保管に加え、近年ではクラウド上でのデータ保存も必要となるが大容量でのデータ移行に伴うリスクや、手間などを考えると優先順位なども加味して判断する必要もある。また一般に広く公開することもアーカイヴの使命であると同時に、著作権に関する配慮も必要である。エフェメラや写真、映像などウェブサイト上に公開することで研究者や舞踏ファンの大きな期待に応えることができる一方、デジタルイメージの濫用から免れることは難しい。Youtube や各種 SNS など画像や映像が勝手に複製され、流用されているのを多々見かけることがあり、著作権者の権利保護が無視されていることを危惧す

催事リスト

	プロジェクト・催事名	開催年
ワークショップ	土方巽アーカイヴ開設記念《四季のための二十七晩》をめぐって ワークショップ	1998
上映、シンポジウム	土方巽アーカイヴ開設記念《四季のための二十七晩》をめぐって 土方巽と舞踏譜 私にとってのディスクール	1998
オープニング・セレモニー	土方巽アーカイヴ開設記念《四季のための二十七晩》をめぐって 舞踏「土方巽に捧ぐ」	1998
式典、上映、講演	土方巽アーカイヴ 出帆の集い	2000
和栗由紀夫+好善社 舞踏公演	野の婚礼——新しき友へ	2003
舞踏公演、展示、上映、シンポジウム	アスベスト館ウィーク「舞踏の火、舞踏の華」	2004
和栗由紀夫+好善社 舞踏公演	魂の旅	2004
和栗由紀夫+好善社 舞踏公演	幻容の道	2005
金沢舞踏館舞踏公演	記憶の海	2006
研究上映会	土方巽舞踏大解剖 正面の衣裳全編上映	2007
研究上映会	土方巽 舞踏 大解剖Ⅱ —— 劇映画の土方巽	2007
室伏鴻舞踏公演	quick silver / HIYOSHI version	2008
研究上映会	土方巽 舞踏 大解剖 別巻『1000年刻みの日時計』	2008
室伏鴻舞踏公演	[国際舞踏ワーク・イン・プログレス] 磁場、あるいは宇宙的郷愁 Les Champs Magnétiques, ou La Nostalgie Cosmique	2009
研究上映会	土方巽・舞踏フィルム上映 in 京都	2009
国際シンポジウム、ワークショップ、上映会	国際舞踏カンファレンス International Butoh Conference [IBC I] Butoh Abroad Today: Its Extension and Succession	2009
研究上映会	土方巽 舞踏 大解剖Ⅳ 痲瘡譚 [土方巽最高傑作] 全編上映	2009
笠井勲舞踏公演	詩と舞踏のセッション／21世紀の ultrasmart 閃光のスフィア——レタイエム	2010
研究上映会	土方巽 舞踏 大解剖Ⅴ 細江英公 写真と舞踏を語る	2010
朗読会	『病める舞姫』を秋田弁で朗読する——米山九日生少年に捧ぐ	2010
ワークショップ、シンポジウム	ウィリアム・フォーサイス×土方巽 身体のイラストレーション	2011
講演、上映	土方巽 舞踏 大解剖Ⅵ HIJIKATA '68-'70-'72	2011
研究プロジェクト、上映	Project Rebirth —— 幻の万博映画「誕生」——アストロラマで踊る土方巽へ	2011
研究会、上映	没後25年 土方巽を語ること	2011
公演	舞踏セッション The Return : 365日の魂へ	2012
研究会、上映	没後26年 土方巽を語ることⅡ	2012
ワークショップ、公演	ビショップ山田舞踏講座	2013
研究会、上映	没後27年 土方巽を語ることⅢ	2013
公演	土方巽『病める舞姫』を秋田弁で朗読する [秋田版]	2014
公演	『病める舞姫』を踊る [秋田版] めっひっひ、まーるめや やっひっひ、まーるめや	2014
中嶋夏 舞踏公演	煙のように 灰のように	2014
研究会、上映	没後28年 土方巽を語ることⅣ	2014
舞踏公演	舞踏公演 Three Dancers ~次の時代へ	2015
公演	青森の民俗／芸能	2015
シンポジウム	パネルセッション：「Ecology of Butoh (舞踏の生態学)」 「Performance Archives (パフォーマンス・アーカイヴ)」	2015
公演、上映、ワークショップ、シンポジウム	PSi 2015 TOHOKU けがれを超えて：パフォーマンスと東北(身体・霊性・巡礼) + AOMORI FRINGE	2015
大野慶人舞踏公演	花と鳥～内部と外部	2015
ディスカッション	トークセッションⅡ パフォーマンスアーカイヴの現在：国際連携をもとめて	2015
ディスカッション	アート・アーカイヴ・マネジメント WG シーズン1 Relationship	2015
研究会、上映	没後29年 土方巽をかたことⅤ	2015
大野慶人舞踏公演	大野慶人レクチャー&パフォーマンス「舞踏という生き方」	2016
研究会、上映	没後30年 土方巽を語ることⅥ	2016
小林嵯峨 舞踏公演	孵化する	2017
研究会、上映	没後31年 土方巽を語ることⅦ	2017
シンポジウム	慶應義塾大学アート・センター20周年事業シンポジウム「ジェネティック・エンジン」	2018
研究会	生成(ジェネティック)するアーカイヴ：創造の軌跡をもとめて	2018
雪雄子舞踏公演	秘光	2018
研究会、上映	没後32年 土方巽を語ることⅧ	2018
上杉満代舞踏公演	命	2019
公開討議	土方巽／アーカイヴ	2019
研究会、上映	没後34年 土方巽を語ることⅨ	2020

る。同時に舞踏に興味を持った方達が土方巽の踊る映像や写真、彼の多彩な活動をインターネットで検索して簡単に様々な情報を得られることの利点も大きいのは事実だ。私の世代ですら、地方出身で舞踏どころかコンテンポラリーダンスに関する情報を得ることに至極苦勞していた自分の経験で考えると今は「土方巽」または「Tatsumi Hijikata」と打ち込むだけで、海外にいる外国人でも〈疱瘡譚〉の有名なソロシーン、バイレロで踊る土方の姿を楽しめるのは嫉妬を覚える位だ。

最後に鷺見洋一による重要な指摘を引用して、これからの土方アーカイヴを考えてゆく一つの指針としたい。「アーカイヴにおける資料の閲覧や公開は、閲覧サービスを目的とする図書館などのそれとは異なり、あくまで本来の研究業務を遂行しつつ、外部の専門的な研究者にオープンな形式で知識を共有していただき、あわせて積極的な批判を要請しながら、研究基盤や方法論的水準で改善を試みるものである」*49。

来訪者に直接対応する機会を利として、率直な意見をヒアリングしてアーカイヴ運営に生かしてゆくこと、また海外からの貸出対応などから資料の整備にあたって何が求められているのか、必要とされている情報発信は何かということ、現場の経験を生かし積極的に反映させてゆきたい。また、筆者自身がこれまで実演家として経験してきたことでもあるが、ネットワークが何においても重要であると考え。国内外の舞踏家やフェスティバル、研究機関やコミュニティや愛好家なども含めて広く繋がりを保ち、新たなコミュニケーションを築き、舞踏を通じた交流の場として機能できること。プラットフォームとしての役割を、今まで同様継続してゆきたい。アート・センターの目指してきた「ジェネティック・アーカイヴ」の指針を失わず、これまでの収集・保存してきた資料をいかに活用、運用してゆくか具体的な計画が重要である。

まずは比較的データの整理やデジタル化の進んでいる以下の項目について、利用者の利便性を考えた公開方法を整備し、順次ウェブサイトやアーカイヴ内での公開を充実させてゆきたい。

- 1、書籍・新聞・雑誌記事
- 2、写真資料
- 3、動きのアーカイヴ
- 4、舞踏譜

既存ファイルメーカーでのデータベースはアーカイヴ内での公開が行われているが、英語での公開を順次本年度から進めている。バイリンガルでの発信が特に土方アーカイヴで重

要なことは言うまでもない。海外からの来訪者も多い中で、優先順位の高い作業となっている。加えて土方アーカイヴに先んじて、2014年頃よりノグチ・ルーム・コレクション等で導入されている美術品運用委員会が管轄する美術品管理データベースへの移行準備を進めてゆく。土方とも関わりの深かった瀧口修造やVICのコレクション等とも横断的な資料検索が行えることを目標に、データベースの構築またはリソースの共有を行いたい。

アーカイヴ活動においては、継続した活動を行うことが非常に重要である。データベースの運営ひとつ取っても、メンテナンスをいかに行うか、必要な人員とコストを獲得できるかどうかは鍵となる。研究アーカイヴをデジタル・アーカイヴとして発信してゆくために、専門家と協働して研究を行うことも必要であろう。加えて資料の著作権者、舞踏関係者との信頼関係を継続させてゆくことも大切なファクターとなる。自己点検と評価体制を整え、「ユニヴァーシティー・アーカイヴ」として舞踏研究の場としてだけでなく、「ポスト舞踏」の時代であるからこそ舞踏の源そして土方巽に「出会える」場として機能してゆくことが必要である。

最後に森下隆が2014年より毎年、年報の中で書き記している問題提議で本論考を締めくりたい。「さまざまな調査・研究のあり方への対応として、資料閲覧や資料提供のあり方、土方アーカイヴの場の活用の仕方を見直す必要があると思われる。『アーカイヴ』の役割や責務を再考するか、『アーカイヴ』を超えた機関を設置することが求められている」*50。

註

- *1 森下隆「土方巽アーカイヴ【寄贈・寄託および預託】」、『ARTLET』no.51、2019年、3頁。
- *2 註1、前掲『ARTLET』no.51。
- *3 アート・センターの設立趣意『慶應義塾アート・センター年報』vol.1、1993年、3-7頁。
- *4 土方巽アーカイヴ開設については、前田富士男「土方巽アーカイヴの開設」、『ARTLET』no.10、1998年、5頁。
- *5 前田富士男「新しいアーカイヴにむけて」、『ARTLET』no.12、1999年、4-5頁。
- *6 鷺見洋一『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.6、1999年、60頁。
- *7 慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター発行『オープン・リサーチ・センター整備事業（ORC）進化するアーカイヴ 慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リ

- サーチセンター報告書（2001-2006）』、2006年。
- *8 森下隆の提言した土方巽の作舞法であり、『芸術のロケーション』慶應義塾大学アート・センター・ブックレット12、2004年、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.12-15、2005-2008年及び註7前掲DARC報告書（2001-2006）に寄稿、最終的に『土方巽 舞踏譜の舞踏——記号の創造、方法の発見』慶應義塾大学アート・センター、2010年及びTakashi Morishita『Hijikata Tatsumi's Notational Butoh: an Innovational Method for Butoh Creation』（英訳・増補版）、慶應義塾大学アート・センター、2015年（2014年文部科学省スーパーグローバル大学創生支援事業として刊行）としてまとめている。
 - *9 森下隆「舞踏の形式について III. 動きの記号分析」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.13、2006年、12頁。
 - *10 柳生康弘「『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン』におけるドキュメンテーションについて」、『ジェネティック・アーカイヴ・エンジン——デジタルの森で踊る土方巽』慶應義塾大学アート・センター・ブックレット6、2000年、18頁。
 - *11 柳生康弘「土方巽アーカイヴ・グループ」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.7、2000年、57-58頁。
 - *12 村井丈美「土方巽に関する雑誌記事の推移」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.11、2004年、13-17頁。
 - *13 前田富士男「文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業 慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター(DARC)最終報告」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.16、2009年、94頁。または慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター発行『オープン・リサーチ・センター整備事業 (ORC) デジタルアーカイヴ——その継承と展開 慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター報告書（2006-2009）』、2009年を参照。
 - *14 現在も閲覧が可能。<http://www.art-c.keio.ac.jp/old-website/archive/hijikata/portas/>
 - *15 現在も閲覧が可能。<http://www.art-c.keio.ac.jp/old-website/a/>
 - *16 作業の詳細内容は、森下隆「[アーカイヴ・イン・プログラム] 土方巽の未公開〈舞踏譜〉のデータ化、その手順——スクリプトシートの公開に向けて」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.22、2015年、116-130頁。
 - *17 研究フォーラム「^{ジェネティック}生成するアーカイヴ——創造の軌跡をもとめて」（2018年10月26日）、慶應義塾大学アート・センター周年事業 KUAC アート・アーカイヴ20周年記念シンポジウム「ジェネティック・エンジン」（2018年11月17日）、「公開討議」土方巽アーカイヴ（2019年1月21日）。詳細は慶應義塾大学アート・センター発行『慶應義塾大学アート・センター周年事業 KUAC Art Archive20周年『ジェネティック・エンジン』』、2019年を参照。
 - *18 石井達朗「土方巽アーカイヴ開設記念：《四季のための二十七晩》をめぐって」、『ARTLET』no.11、1999年、2-3頁、および慶應義塾大学アート・センター編、『燦爛大踏鑑：四季のための二十七晩』、1998年。
 - *19 森下隆「展覧会協力『肉体のシュルレアリスム 舞踏家土方巽抄』展」、註12、前掲『年報』vol.11、38-39頁。
 - *20 「土方巽を語ること」の催事報告は『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.18-26、2011-2018年を参照。
 - *21 2001、2002、2007、2009年は非開催。新入生歓迎行事に関しては、慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会（HAPP）のウェブサイトを参照。<http://happ.hc.keio.ac.jp/>
 - *22 註7、前掲『DARC報告書（2001-2006）』及び註8、前掲『DARC報告書（2006-2009）』を参照。
 - *23 村井丈美「土方巽アーカイヴ」、註12、前掲『年報』vol.11、67頁。
 - *24 森下隆「舞踏の形式について II. 舞踏譜のデジタル表現 その可能性と有効性」、註7、前掲『DARC報告書（2001-2006）』。
 - *25 森下隆「舞踏の形式について V. 拾遺 森羅万象」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.15、2008年。
 - *26 DVD「土方巽の舞踏譜の舞踏 Hijikata Tatsumi Notational Butoh」慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴ監修、DMC機構制作・著作、2007年。
 - *27 註8、前掲書。
 - *28 山本萌『COSTUME EN FACE : A PRIMER OF DARKNESS FOR YOUNG BOYS AND GIRLS』Ugly Duckling Presse、2015年。
 - *29 森下隆、本間友編、報告書『Project Rebirth 幻の万博映画「誕生」——アストロラマで踊る土方巽へ』2012年。
 - *30 村井丈美「土方巽アーカイヴ」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.9、2002年、58頁。
 - *31 森下隆、村井丈美「土方巽アーカイヴ」、『慶應義塾大学アート・センター年報』年報vol.12、2005年、45頁。
 - *32 鷺見洋一、註7、前掲『DARC報告書（2001-2006）』、5頁。
 - *33 POHRCは2013年にローザ・ヴァン・ハンスベルゲンと石本華江により、土方巽の舞踏を学ぶ研究会として発足。

土方アーカイヴからの研究協力を得て、2019年まで連続して7年間土方舞踏を学ぶワークショップや公演及びシンポジウム・上映会を開催する。「海外女流ダンサー・ウィーク東京」及びPsi 2015 TOHOKUにも運営協力。<http://butoh-ws.com/ja/>

土方アーカイヴではPOHRCの一環プログラムとして、「土方巽 最後の言葉 extra version」(2014年)にて宇野邦一と山本萌による講演を開催した。詳細は註16、前掲『年報』vol.22を参照。

- *34 国際舞踏連絡協議会 LIB 発行『[報告書] 国際舞踏カンファレンス IBC2009』2010年。
- *35 森下隆「海外女流ダンサー・ウィーク東京」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.21、2014年、13-14頁。
- *36 森下隆「舞踏交流・海外ダンサーシリーズ vol.2 世界から BUTOH がやってくる!」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.23、2016年、17頁。
- *37 森下隆「アート・アーカイヴ資料展 XVIII「土方巽、トリックスター／肉体の叛乱 1968-2018」展」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.26、2018年、42-43頁。
- *38 この他にも2006年ロシア、2007年ニューヨーク、2008年イタリア、ロシア、ブラジル、フランス、インドネシア、2009年ブラジル、イタリア、スウェーデン、2010年ロシア、中国、2011年ハンガリー、2012年イギリス、2013年アメリカ、2014年中国、2016年タイ、台湾、2017年インドネシア、2018年スウェーデンでの公演の企画・制作、講演を行う。
- *39 大林のり子、小菅隼人、大谷理奈、本間友、森山緑『Psi 2015 TOHOKU [国際パフォーマンス・スタディーズ学会 2015 東北大会] けがれを超えて：パフォーマンスと東北(身体・霊性・巡礼)』慶應義塾大学アート・センター、2015年及び、森下隆「Psi2015 TOHOKU 国際パフォーマンス・スタディーズ学会 2015 東北大会」、註36、前掲『年報』vol.23、7-8頁を参照。
- *40 森下隆「古川の記憶と再生——舞踏創造のマトリクス」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.18、2011年、11-30頁。
- *41 渡部葉子「ウィリアム・フォーサイス×土方巽 身体のイラストレーション」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.19、2012年、7-8頁。
- *42 森下隆、上演・催事については「土方巽『病める舞姫』を秋田弁で朗読する——米山九日生少年に捧ぐ」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.17、2010年、58-59頁。研究・プロジェクトについては「東京文化発信プロジェクト 学生とアーティストによるアート交流プログラム「土方巽『病める舞姫』を秋田弁で朗読する」」、同『年報』、80-82頁。
- *43 森下隆「秋田版『病める舞姫』上演会 土方巽『病める舞姫』を秋田弁で朗読する・秋田版『病める舞姫』を踊る・秋田版」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.22、2015年、15頁。
- *44 森下隆「【特別企画】命の実感プログラム 土の土方像と水滴の時間」、註13、前掲『年報』vol.16、54-55頁。なお2012-13年には「原始感覚美術祭」において「土の土方像」を祈りの雨版として新たに制作・展示を行なった。
- *45 森下隆「土方巽コレクション」、『慶應義塾大学アート・センター年報』vol.26、2019年、36頁。またFutureLearn ウェブサイト <https://www.futurelearn.com/courses/japanese-avant-garde-art-butoh> を参照。
- *46 鷺見洋一、前掲『DARC 報告書 (2001-2006)』、28-29頁。
- *47 村井丈美「iPalletnexus™ による土方巽舞踏譜読み取りおよび分析」、前掲『DARC 報告書』を参照。
- *48 森下隆「土方巽アーカイヴ」、註43、前掲『年報』vol.22、22頁。
- *49 鷺見洋一、前掲『DARC 報告書 (2001-2006)』、28-29頁。
- *50 森下隆「土方巽アーカイヴ」、註43、前掲『年報』vol.22、22頁。